

レーザーコンパス

開 拓 の 道

内 田 岱 二 郎*

Taijiro UCHIDA

核融合はいつ頃実現するのでしょうか、と皆様もよく尋ねられるであろう。いつになるか実のところはつきり言えないと応えると、では貴方自身はいつ頃と信じていますかと、重ねてきてくる。実はこの間には2つの意味があり、1つは何時という言葉に対する数字的な答の要求そのまま、今1つは核融合制御という途方もない事業についての貴方自身、本当に成功を信じていますかという、人間的情熱についての問合せである。

私達平凡な人間は、どうもこういう問は苦手である。顔面朱を注いでそのような愚問の非礼を先づ問いつめ、しかる後に核融合がいかにか近くにあるかを滔々と辨じ、明日にでも成功するような薔薇色の感覚（又は錯覚）を与えて追い返すという芸当はとても出来そうにもない。一方で、何事も効率第一主義の世の中であるから、いつ成功するかわからぬものに20年近くもしがみついているわれわれに、何か異常さを感じとろうとする訊く側の気持もわからぬわけではない。たしかにわれわれは自分達の歴史の中でその20年を消すわけにはゆかない。

「山が、そこにあるからだ」式の答もよからう。核融合が人類最後の夢だからもきれいである。あるいはプラズマ物理の学問的興味とこたえるのも間違っていない。今さら他の分野に逃げ出せないからというのも正直か

もしれぬ。しかし人間が長い間一つの仕事を続けるうちには、やはりその人間一人一人のうち何か意地めいたもの根性めいたものが、支えとなっているように思われてならない。

私の友人に小説家がいる。その奥様は大変美しく少し甘たれた騒しいところも見受けるが、それが却って人目を惹き、華やかさに花添える結果となって常に話題が絶えない。その話題の多くは彼女が名にし負う悪妻ということである。もとより家の中の出来事は外から伺いしることが出来ないが、その彼が先日結婚20年のお祝いに招いて見送りの途次、面白い話をしてくれた。

結婚を申込むとき、彼は彼女が稀代の悪妻になるだろうことを明確に予感したのだそうである。その朝乗った2人のボートがいくら漕いでも少しも進まず、そのこと自体結婚の前途を象徴するものと鮮明な印象をうけたが、却って踏切るきっかけになったのだそうである。

この辺のロジックは今の時代とは相容れないかもしれない。単純に困難なことへの挑戦という一つのヒロイズムに擬するのも多分間違っていないであろうが、その彼等が今日結婚20年を迎えたのである。横井さんや小野田さんや中村さんに限らず、こういった選択と長い年月の例は、案外われわれのまわりにもあるかもしれない。

* 東京大学工学部原子力工学科

* Department of Nuclear Engineering, Faculty of Engineering, University of Tokyo